The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	言語の複雑性研究の現状
Author(s)	渋谷, 勝己
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2022, 18, p. 119-144
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86408
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大社会言語学研究ノート』第 18 号（2021 年 11 月）119-144
〈展望論文〉

言語の複雑性研究の現状

渋谷　勝己

【要旨】

言語研究界には、「言語の等複雑性（equi-complexity）＝すべての言語は同じように複雑である」というこれまで検証されずにきた考え方（仮説）がある。近年、この仮説の検証／反証がさまざまなかたちでなされるようになった。本展望では、この分野の近年の動向について次の順序で整理した。①複雑性研究の源流には、主に言語の複雑化の側面を研究する歴史研究や文法化研究、単純化の側面を研究する接触言語学、両者を研究する社会言語類型論などがあること、②複雑性を測定する指標として、上記諸分野の興味と連動してさまざまなものが試行的に使用されていること、③その試みのなかで、トレードオフの研究や社会言語類型論的な研究の成果が着実に積み重ねられてきたこと。また、今後の課題として、①トレードオフの関係にある言語事象がないか確認しつつ、言語の複雑度を測るための指標を継続的に模索していくこと、②その指標によって、言語の複雑度と社会の類型の相関関係の有無を、これも継続的に追究していくこと、③社会の類型に文化的な特徴を組み込むことの可能性を検討すること、④各言語の標準変種を主なデータとして構築してきた言語類型論の成果を見直すこと、などの必要があることを述べた。

【キーワード】等複雑性仮説、複雑化、単純化、トレードオフ、社会言語類型論

1.　はじめに

これまで言語研究界においては、研究の前提として論証されることなく、そのまま受け入れられてきた考え方（神話）がいくつかある（渋谷 2019）。そのなかのひとつに、「言語の等複雑性（equi-complexity）＝すべての言語は同じように複雑である」というものがある。この仮説はその内部に言語事象間のトレードオフの仮説（ある下位システムが複雑であれば、関連する別の下位システムは単純である）の存在を想定するもので、次のような考え方である（下線は筆者。以下同様。なお、この分野で使用される用語の訳語にはまだ確定していないものが多いので、本展望では、用語、言語的指標、分析結果、各研究者の主張等の記載はおおむね原典をそのまま引用するかたちで行う）。

（1）Objective measurement is difficult, but impressionistically it would seem that the total grammatical complexity of any language, counting both morphology and syntax, is about the same as that of any other. This is not surprising, since all languages have about equally complex jobs to do, and what is not done morphologically has to be done syntactically. Fox, with a more complex morphology than English, thus ought to have a somewhat simpler syntax; and this is the case. (Hockett 1958: 180-181)

（2）A language which is simple and regular in one respect is likely to be complex and confusing in others. There seems to be a trading relationship between the different

parts of the grammar which we do not fully understand. (Aitchison 1981: 226)

(3) All languages have a complex grammar: there may be a relative simplicity in one respect (e.g. no-word-endings), but there seems always to be relative complexity in another (e.g. word position.) (Crystal 1987: 6)

このような考え方は、上の引用中に‘impressionistically’や‘seem’ということばが使用されていることからわかるように、論証されているわけではない。ようやく（主に反証を目的とする）研究が着手された段階である。

ではそもそも、このような主張がなされ続けてきたのはなぜであろうか。このことには、近代言語学の成立期（とくに 19 世紀から 20 世紀前半）の、一般社会にあった言語に関する通念、すなわち、言語には、それが使用される社会を反映した、「文明の言語」と「未開の言語」というものがあるという思い込みがかかわっている。ヨーロッパの言語は文明社会の言語であり、その言語のシステムは複雑に発展している。それに対してアジアやアフリカなどの未開社会で使用される言語は未開の言語であり、その言語システムもシンプルなものである、とする思い込みである。これに対して、20 世紀初頭から、アメリカなどをフィールドとして、クローバーやサピア、ブルームフィールドらによって、アメリンディアンの言語の記述研究が精力的に行われるようになる。そこでは、ヨーロッパの諸言語とはタイプの異なる、独自の特徴をもった精緻な言語のシステムが見出され、ここに、一般社会の思い込み（言語に優劣を認める評価的態度）とは異なる、相対論的な視点が確立する。言語の記述に従事する言語学者にとっては、相対論的な考え方を世の中に普及させることは自分たちの社会的な使命であり、その行為がステレオタイプ的に「言語の等複雑性」の主張となって現れたものと考えられる。もちろんこの根底には、それぞれの研究者がそれぞれに言語を記述するなかで得た、等複雑性に関する直感もあったであろう。

しかし一方では、とくにさまざまな言語の記述を行っているフィールドワーカーの間には、言語によって複雑さの度合いに違いがあるという経験的認識が生じていたのも事実である。たとえば次のような認識である。

(4) これまでの証拠から見て、文法的にきわめて複雑で珍しい言語は、しばしば他の言語とは無縁の隔離された言語であって、伝統的な生活様式が脅威にさらされている小部族によって話されているように思われる。中国語、英語、スペイン語、アラビア語といった、5,000 万人以上の人々によって話されている「世界的な」言語の大多数は、対照的に、隔離された言語ではなく、また小言語の文法的な複雑さももたない。言語には、拡散しつつ別の言語と接触し、単純化するという強い傾向がある。たとえば、英語はノルマン人のイングランド征服の後、フランス語から多くの語彙を吸収し、何世紀もかけてドイツ語やアイスランド語などの保守的なゲルマン諸語になお見られる文法的な複雑さの多くを失った。この違いは、現代アイスランド人が現在もアイスランド・サガを読めるのに、『ベーオウルフ』のような古英語による叙事詩の言語が、現代のイギリス人読者にとってはまるで異質な言語であることを考えれば明らかである。多数派の言語は、文法的に簡素化されてしまっているのだ。〔中略〕小集団のなかで集団内コミュニケーションのためにのみ使わ

れる言語は、複雑になる場合がある。こういう複雑さに向かう傾向は、日常的なコミュニケーションを交わし合う友人同士とか同一家族の成員間に観察される。（ネトル・ロメイン 2001: 17-18）

（5）[T]he most complex grammatical systems, with the most finely delineated instances of prototypical patterns, are typically found in languages spoken by small tribal groups, whereas many features of languages spoken over a wide region—or across the world, as with English and Spanish—are relatively simple and straightforward. (Dixon 2010: 7)

本稿では、(4) や (5) の認識を踏まえつつ、(1) ～ (3) のような「言語の等複雑性の仮説」あるいは「ある下位システムが複雑であれば、関連する別の下位システムは単純である」という「トレードオフ仮説」を検証あるいは反証することを試みた、近年の研究の流れと成果を整理することを試みる。具体的には、2 節で複雑性研究の歴史を簡単に整理したあと、3 節においてこれまで提示されてきた複雑性を測定するための指標をいくつか確認する。また 4 節では複雑性をめぐって行われてきた研究を、1 つの言語や変種の内部事象であるトレードオフの研究（4.1）と、複数の言語や変種を対照する社会言語類型論（4.2）の 2 つに分け、それぞれの考え方と研究の達成点を整理することにする。なお、3 節で取り上げる複雑性の指標と、2 節や 4 節で取り上げるそれぞれの研究分野の考え方や達成点は連動するものであるので、本来であれば切り離して論じてはいけないところである。しかし、使用される指標には分野の異なりにかかわらず共通するところも多くあり、本展望では分けて整理することにした。また、複雑化の研究は、音素や音節の体系、形態論、統語構造など、さまざまなレベルを対象として行われているが、本展望では言語の形態統語的な側面について行われた研究を、展望の主な対象とする。

2. 複雑性研究の源流

最初に、近年行われている複雑性研究の出発点を確認しておこう。研究の源流は実際にはさまざまなところにあるため、必ずしも特定の研究に限定できるものではないが、ここでは、2.1 で言語が複雑化する側面（complexification）に注目する研究を、2.2 で言語が単純化する側面（simplification）に注目する研究を取り上げる。前者の取り上げる複雑化は（数百年、千年単位の）比較的長い時間をかけて起こる事象であり、主に歴史言語学や文法化研究の研究対象となってきた。それに対して後者の単純化は、言語接触等によって比較的短時間で起こる事象であり、主に社会言語学や言語接触研究（ピジン・クレオール研究、コイネー研究、第二言語習得研究等を含む）によって注目されてきている。

2.1. 複雑化の研究（歴史言語学・文法化研究）

言語が複雑化する側面を取り上げた研究には長い歴史があり、すでによく知られているので、ここではごく簡単に記す。

言語が単純化する場合とは異なって、言語が複雑化するには一定の時間が必要であり、この側面の研究は主に歴史言語学や文法化研究が担ってきた。後者は Meillet（1958[1912]）

を出発点とすることが多いが、「文法化」という用語は使用しなくとも、文法化の研究そのものは、日本語の助詞や助動詞も含めて、さまざまな言語のさまざまな事象を対象として行われている。歴史言語学や文法化研究の成果について、本稿に関連するところには、たとえば次のようなものがある。

① 形態論的サイクル：言語の形態的タイプについて、〔孤立的→膠着的→屈折的→孤立的〕という変化の方向性があること。言語が複雑化する方法へと変化し、屈折接辞が摩滅することによって孤立タイプにもどって再び新たなサイクルが始まるといったアイディアである（Bynon 1977: 265 など）。

② 文法化のタイプ・原理：文法化や文法化のタイプ・原理の捉え方は研究者によって多様であるが、次のような事象が注目されてきた。パラダイムの中への組み込み（paradigmatization）、義務的表現化（obligatorification）、形式の縮約化（condensation）、隣接形式との融合（coalescence）、形式の順序の固定化（fixation、以上 Lehmann 1985）：複数の同義文法形式の併存（layering）、ひとつの形式の語彙的・文法的形式への分化（divergence）、複数の文法形式の一形式への収束と当該形式の意味の一般化・多様化（specialization）、当該形式がもともと担っていた意味・機能・分布等の継承（persistence）、名詞・動詞起源の形式の脱名詞・動詞化（de-categorization）（Hopper 1991）：context extension、desemanticization、decategorization、erosion（Narrog & Heine 2021）など。

このような成果を踏まえつつ、本展望が対象とする言語の複雑性の問題に積極的に発言しているのは、Dahl である。Dahl（2004, 2008）は、「文法の成熟化（maturation）」という語をキーワードにして、言語が文法化等を進めることによって成熟し、複雑な体系を獲得するに至る過程を描き出している。ただし、Dahl の採用する「複雑性」の特徴は、以下で取り上げる Kusters や Trudgill のそれとは異なり、以下のように定義される絶対的な複雑性である。

（6）complexity is seen as an absolute property of an object rather than a relational one defined in terms of the difficulty for a user. The basic idea is that the complexity of an object can be identified with the length of its shortest possible complete description or specification. (Dahl 2008: 153)

このことについては、2.5 であらためて整理する。

2.2. 単純化の研究（接触言語研究）

一方、言語が単純化する側面を取り上げる研究にはいくつかの分野があるが、言語の単純化には言語の接触ということがかかわることが多い。ここではピジン・クレオール研究をあげておこう。

ピジンやクレオールの研究においては、Mühlhäusler（1974）や Meisel（1983）をはじめとして言語が単純化する様相が記述され、またそれが拡張ピジンやクレオールへと発展する複雑化の過程も追究されてきた。そのなかで、クレオールは他の言語と同じように複雑であるとする主張がなされることもあるが（第 1 節の言語相対論参照）、McWhorter（2001）

は、「(old languages に対して) クレオール文法は最も単純な文法である」ということを主張し、当該論文が掲載された雑誌 (*Language Typology*) の当該号において論争が行われた。McWhorter の論文は現在でもしばしば引用されるところとなっている。

McWhorter の考え方については以下の 3.3 であらためて取り上げる。

2.3. 複雑化・単純化の両者を対象とする研究（社会言語類型論）

これまで行われてきた複雑性をめぐる研究には、(上で見たようにいずれか一方に偏ることも多いが) 複雑化と単純化の両者に注目するものもある。ここではひとつの言語の変種研究（2.3.1）と、それを含む、社会言語類型論（2.3.2）をあげておこう。

2.3.1. １言語の変種研究

この研究の代表は、Kortmann et al.（2004a, b)、あるいはそれに基づく Szmrecsanyi & Kortmann（2009a, b）などによる、世界の英語変種の記述的、類型論的な研究である。Kortmann et al.（2004b）では、所定の項目を調査することによって得られた世界の英語変種のデータを対象に帰納的アプローチがとられており、“the importance of incorporating in typological theorizing what we know about the impact of society structure, social networks, social attitudes, and language contact (8ff.) ”との認識から、世界の英語を、①L1 high contact varieties（接触の多い地域で使用される母語としての英語)、②L1 low contact varieties（接触の少ない地域で使用される母語としての英語)、③L2 varieties (第二言語としての英語)、④pidgin/creole English の 4 つに大きく分類し、その形態的、統語的な対照研究を行ってそれぞれの変種の特徴を明らかにしようとしている（この分類の妥当性は Szmrecsanyi & Kortmann 2009b 等によって確認されている)。同様に Kortmann et al.（2004a）では音声・音韻面を整理している。

Kortmann らの研究が採用した指標（調査項目）は、3.4 で取り上げる。

2.3.2. 社会言語類型論

言語接触や方言接触を研究する人々は、大都市や広域で使用されて接触を繰り返す言語や変種、接触によって形成された言語や変種（ピジン・クレオール、コイネーなど）に単純な体系が見出されることに、早くから注目している（上記（4）（5）の引用参照)。このような観察に基づいて、ことばが使用される社会の類型 (人的接触の多い大都市・それが少ない周辺部など）と、そこで形成、使用される言語や変種の複雑度の相関を解明するべく発展してきたのが、社会言語類型論である。このアイディアは、たとえば Trudgill においては、Trudgill（1986）でその輪郭が描き出され、その後個別の論考で個別の言語事象に分析を加えたあと、Trudgill（2011）として集成されている。次のようなアイディアである。

- ことばには、社会的に、成人の第二言語習得の対象となってきた言語・変種（標準語・都市言語など）と、狭い閉じられた社会で何世代にも渡って（幼児の言語獲得によって）継承されてきた言語・変種の、大きく２つのタイプがある。
- 前者の言語システムは単純（simple）なものになるのに対して、後者の言語システ

ムは複雑（complex）なものになる（ただし、バイリンガル児が関わる長期的な言語接触は付加的な複雑性（additive complexity）をもたらすことがある）。

Trudgill の社会類型論的研究は他の研究者にもさまざまな影響を与え、Kusters（2003）や Sinnemäki（2011）をはじめとするモノグラフや、2.5 にあげる論文集・会議録となって公刊されている。4.2 で詳しく述べるように、この種の研究は、系統の異なる、あるいは遠く離れた地域で使用される言語同士を比較するよりも、異なった社会的状況において使用される系統的に近い言語や、同じ言語の異なった変種（方言）を取り上げるほうが、操作、分析が施しやすく、その結果にも説得力が増す。上の Kortmann et al.（2004b）もそうであるが、Kusters（2003）が取り上げたアラビア語の諸変種、スカンジナビア諸語、ケチュア語の諸変種、スワヒリ語の諸変種や、Braunmüller（2016）が対象としたゲルマン諸語なども、このような理由で選択されている。日本語や琉球語の諸方言なども、このような観点から分析するのに適した対象である。

接触言語・変種を対象とした社会言語類型論的な研究の成果は 4.2.4 で取り上げる。

2.4.　その他の研究

以上のほかにも、complexity という語をタイトルに含む刊行物や、complexity という語を含まなくとも本稿がレビューする分野に関する刊行物が数多く著されている。前者については、たとえば次のようなものがある。

Givón, T. (2008) *The Genesis of Syntactic Complexity.*

Hawkins, J. A. (2007) *The Efficiency and Complexity in Grammars.*

Givón（2008）は diachrony だけでなく、ontogeny、phylogeny などのさまざまな現象において言語に複雑性が発生するメカニズムを議論するものであり、Hawkins（2007）は processing のあり方と言語の構造（語順など）の関係などに注目するものである。いずれ本稿が取り上げる複雑性研究とリンクするものと思われるが、本稿の対象からは除く。

2.5.　各アプローチの特徴が現れるところ

ここで、2.1～2.3 で取り上げた研究の特徴を整理しておこう。それぞれの研究（に従事するそれぞれの研究者）の特徴が現れるのは、次のような点である。

(a) 複雑化に注目するか、単純化に注目するか、両者に注目するか。

(b-1) 言語面について、ことばの広範な (global) 特徴を対象とするか、個別的な (local) 特徴を取り上げるか。理想的には前者であるが、現在は後者を積み重ねている段階である。トレードオフ（ある言語項目が単純になると別の項目が複雑になる）＝等複雑性の検証を対象とする研究は必然的に後者になる（4.1）。

(b-2) morphosyntax だけに注目するか（このタイプの研究が多い）、音素体系・音節構造・アクセント・トーンなどにも注目するか。主に形態論的に孤立語的な特徴をもつ言語を研究している研究者は、さらに、意味や語用論的推論などの、形式だけでは見えない部分（Bisang 2009 の hidden complexity など）も視野に入れている。Hidden complexity とは、Bisang（2009）によれば、

1. individual markers that carry a wide range of function
2. seemingly simple surface structures which can represent more than one construction

などのことである。

（c-1）形成要因について、言語の構造（要素の数や透明度、その相互の関係）だけを取り上げて議論するか（absolute)、そのような構造が生じた認知的・社会的要因（話し手の産出・聞き手の理解の難易度及びそのどちらを重視するか、大人の第二言語習得を含むか否か、幼児による継承＝母語獲得が中心か否かなど）も視野に入れるか（relational/relative、上記引用（6）参照)。

（c-2）言語の自律的な変化を中心に考えるか、接触による変化も視野に入れるか。

これらの特徴のうち、とくに研究者間、分野間で違いが観察される項目を概括的にまとめると、表 1 のようになろう。

表 1　各アプローチの特徴

	2.1 文法化研究	2.2 クレオール研究	2.3 社会言語類型論
(a) 複雑化/単純化	複雑化	単純化	両者（単純化に傾く）
(c-1) 社会的要因への注目	なし	あり	あり
(c-2) 自律変化/接触変化	自律変化（例外あり）	接触変化	両者（接触に傾く）

以上のような特徴をもつ各アプローチ、分野は、それぞれ別個のものとして発達してきたという経緯があり、これまでそれほど接点があったわけではない。しかし、近年では、次のような、さまざまな交流が行われるようになっている。

・　多様な立場の研究者が参加するシンポジウムとその論文集の刊行

Miestamo et al. (eds.) (2008)：主に言語接触（L2 習得）と単純化（complexity reduction）の問題を取り上げたもの。

Sampson et al. (eds.) (2009)：等複雑性に異を唱える多様な研究者による問題意識・方法・分析結果等を提示したもの。

Kortmann & Szmrecsanyi (eds.) (2012)：主に pidgin/creole、L2、中間言語等の接触言語の複雑性の問題を取り上げたもの。

・　ジャーナルでの議論

Linguistic Typology 5 (2001)：McWhorter の基調論文（2.2 クレオールの単純性）とその議論

Linguistic Typology 8 (2004)：Trudgill の基調論文（2.3 社会言語類型論）とその議論

以上のうち、前者の論文集については各研究者の立場が述べられるだけで、議論までに発展しているケースは少ないが、(c-1) の認知的・社会的要因を考慮するか否かについては、easy for whom（ある言語の第二言語としての習得の容易さ＝複雑度は習得者の母語に依存することはないか）という問題をめぐって、Dahl らと社会言語類型論研究者の間で議論が

行われている。2.3.2 で述べた、社会言語類型論研究者が、系統的に類似する言語・方言を対象とすることでこの問題を迂回しようとしたことは、その結果である。後者のジャーナルにおいては、とくに McWhorter の基調論文について、クレオールの起源についての論争も反映するかたちで賛否両論が活発に展開されている。

以上、本節では、近年の複雑性研究に流れ込んだいくつかの源流的な研究を概観した。次節以下では現在行われている複雑性研究の現状を整理する。具体的には、3 節で複雑性を測定するのに使用されている指標を整理し、続く 4 節でその指標を使用して得られた研究結果を概観することにする。

3. 複雑性の定義と測定指標：４つの事例

本節ではまず、各研究が、①ことばの複雑性をどのように定義し、②それぞれの言語や変種の複雑性をどのような指標によって測定しているかということを概観する。結論を先に述べれば、複雑性は、現状では定義・測定法ともに試行錯誤を繰り返している状況にあり、次の Larsen-Freeman（2012: 3-4）の判断が妥当なところのように思われる。

（7）[I]t is probably not a matter of arguing among ourselves about which definition or treatment of complexity is right, however. It is a matter of choosing from among those which are available those that are right for a given purpose.

たとえば日本語の方言のなかには、アクセントについて、無アクセントの方言と有型アクセントの方言があるが、前者は形式は単純でも個々の語の解釈には文脈情報が必要な点で複雑である。一方、京阪アクセントや東京アクセントはアクセントの型をもっており、聞き手にとっては形式と意味の対応が無アクセントよりも透明で解釈しやすいが、習得に負担がかかるなど、個々の方言の個々の事象の複雑性を認定するには考慮すべき点が多い。また、複数の基準が考えられるとき、どの基準を優先するかによって複雑性の判断が異なることもある。構成要素の数と類像性（iconicity）などがその例で、たとえば（I met）Tom の形態的複雑度は、構成要素の数という点では複雑度は低いが、類像性という点では対格の表示がないために不透明である（複雑度が高い）ということになる。いずれにしても、個々のトレードオフ研究や、個別の言語事象のもつ複雑性の分析の積み重ねが必要な段階であるが、この進捗状況については 4 節で整理する。

以下、本節では、これまでに提案された複雑性の指標のなかから、Baechler & Seiler（2016）、Nichols（2016）、McWhorter（2001）、Szmrecsanyi & Kortmann（2009a）の、タイプの異なる 4 つを概観することによって、その異同を見ておきたい。前 2 者はとくに言語を限定しないで（Nichols の場合には分析の対象とした言語のデータから帰納して）設定された指標であるのに対して、McWhorter（2001）はクレオールが比較的単純な言語であることを論証するための指標であり、特定の言語グループを対象としたものである。Szmrecsanyi & Kortmann（2009a）は英語という個別言語（とそれを取り巻く）変種の複雑性を測るためのもので、対象とする言語の枠がさらに限定されている。

3.1. Baechler & Seiler（2016）の指標

最初に取り上げる指標は、哲学者の Rescher (2019[1998]: 9) によるものである。Rescher の分類は必ずしも言語だけを対象とするものではないが、Karlsson et al.（2008: viii-ix）などが言語を対象とするものとして若干簡略化しつつ改定を加えた。他の研究が採用する基準もおおむねカバーするもので、もっとも包括的な指標として汎用性が高い。ここでは Baechler & Seiler（2016: 4）から、表 2 として引用する。

表 2　Modes of complexity (Baechler & Seiler 2016: 4)

1. Epistemic modes A. Formulaic complexity a. Descriptive complexity: length of the account that must be given to provide an adequate description of a given system. b. Generative complexity: length of the set of instructions that must be given to provide a recipe for producing a given system. c. Computational complexity: amount of time and effort involved in resolving a problem.
2. Ontological modes A. Compositional complexity a. Constitutional complexity: number of constituent elements (e.g., in terms of the number of phonemes, morphemes, word, or clauses) b. Taxonomic complexity (or heterogeneity): variety of constituent elements, that is, the number of different kinds of components (e.g., tense-aspect distinctions, clause types). B. Structural complexity a. Organizational complexity: variety of ways of arranging components in different modes of interrelationship (e.g., phonotactic restrictions, variety of distinct word orders). b. Hierarchical complexity: elaborateness of subordination relationships in the modes of inclusion and subsumption (e.g., recursion, intermediate levels in lexical-semantic hierarchies).
3. Functional complexity A. Operational complexity: variety of modes of operation or types of functioning (e.g., cost-related differences concerning the production and comprehension of utterances). B. Nomic complexity: elaborateness and intricacy of the laws governing a phenomenon (e.g., anatomical and neurological constraints on speech production; memory restrictions).

二次的な分類（3 つの一次モードのなかの A、B）のみごくおおまかな説明を加えれば、Formulaic complexity は当該事象を記述するのに必要なルールの数の面に見る複雑さのことで、言語学では依拠する理論によって異なる可能性がある。Compositional complexity と Structural complexity は言語そのものに関する指標であり、前者は言語を構成する音素・形態素・語・節の数や、アスペクト・テンス・ムードなどの文法カテゴリーを構成する要素数など、体系内で対立関係にある要素の数による複雑さを言う（数が多いものほど複雑である）。後者は構造の複雑さに言及する特徴で、要素の配列のあり方と要素間の階層関係に観察される複雑さである。Operational complexity と Nomic complexity は認知的、生理的な指標であり、前者は発話の産出や理解にかかわる操作の複雑性、後者はその解剖学的、神経的制約の複雑性や記憶にかかわる複雑性などである。

3.2.　Nichols（2016）の指標

次に、個別に行われたボトムアップの研究に移って、まず Nichols（2016）のあげる指標を見てみよう（Nichols 2009 も参照）。Nichols（2016）は、コーカサス地域、および、東ユーラシアのステップ地域で使用される言語の、2 つのケースを取り上げ、言語の複雑度とその言語が使用される社会的な特徴の相関を分析した社会言語類型論的な研究である。そこで使用された指標（complexity type）は、表 3 のようにまとめられる。

表 3　Nichols（2016）の指標

complexity type	**inventory size + opacity** 1. number of elements 2. number of paradigmatic variants 3. syntagmatic phenomena (dependency: agreement, valence etc.) 4. constraints on elements, alloforms, syntagmatic dependencies, including constraints on their combinations
linguistic variable	**cross-linguistic variables** Phonology ・number of contrastive obstruent manners of articulation ・vowel qualities (high/mid/low), tones (yes/no) Synthesis ・index of verb inflectional synthesis the number of different inflectional categories marked on the maximally inflected verb form ・verb polyagreement (2 arguments or more): arguments obligatorily marked on the verb ・noun plural marking (yes/no) ・noun dual marking (yes/no) Classification ・numeral classifiers (yes/no) ・overt possessive classification (0/1/2 classes) ・gender agreement (yes/no) ・overt inherent gender (non-agreement, marked on the noun itself) Syntax ・number of major clause alignments (other than neutral) ・number of basic clause word orders ・noun incorporation (yes/no) Lexicon ・inclusive/exclusive opposition (in independent personal pronouns) ・number of different formal types of causative alternation in 9-verb list ・number of suppletive pair in that list **language/area specific variables** it is difficult to capture differences within areas and within families using variables developed for cross-linguistic work, and difficult to find morphological variables that generalize well across families and types. The variables for Daghestan include some more or less Nakh-Daghestan specific variables...(133)

要素の数（表の inventory size。Baechler & Seiler（2016）の Compositional complexity）と透明さ（opacity。Baechler & Seiler（2016）の Structural complexity）がその指標の枠組みで、表の linguistic variable 欄に示した項目が、調査の対象となった言語項目である（通言語的に比較できる項目と、個別言語的な項目を含む）。なお、この研究の結論は、対象地域の中心部（言語伝播の中心地）の言語よりも、周辺部の言語のほうが複雑であるという、社会言語類型論の仮説を支持するものであった。

3.3. McWhorter（2001）のクレオールをめぐる指標

McWhorter（2001）による指標は、クレオールと、長時間かけて歴史的に発展してきた言語（old languages）を比較して取り出されたものである。McWhorter の主張はクレオールの文法は old languages に比較して単純なものであるという点にあり、表 4 のような言語の側面に注目している（一部筆者補記）。

表 4　複雑さを把握するための 4 つの diagnostics（McWhorter 2001: 135ff.）

(a) a phonemic inventory is more complex to the extent that it has more marked members. Markedness is here intended strictly in reference to crosslinguistic distribution.（marked = 世界の言語に少ないもの：ejectives, clitics, labialized consonants, unmarked = stops, rounded back vowels, glides） A tonal system is more complex than another one when it has more tones.
(b) a syntax is more complex than another to the extent that it requires the processing of more rules.（asymmetries between matrix and subordinate clauses, containing two kinds of alignment rather than one（split ergative など）） (c) a grammar is more complex than another to the extent that it gives overt and grammaticalized expression to more fine-grained semantic and/or pragmatic distinctions than another.（英語の *be* と日本語の *aru/iru*）
(d) inflectional morphology renders a grammar more complex than another one in most cases.（morphophonemics, suppletion, declensional and arbitrary allomorphy, agreement なども含む）

そして McWhorter は、この指標に基づきつつ、既存のデータや研究者から得た情報を精査した 19 のクレオールには見出されない（が、当該クレオールの形成に関与した語彙供与言語や基層言語の多くには観察される）特徴、すなわち、言語を複雑なものにする特徴として、以下のものをあげている。

表 5　19 クレオールに見出されない特徴（McWhorter 2001: 163）

- ergativity
- grammaticalized evidential marking
- inalienable possesive marking
- switch-reference marking
- inverse marking
- obviative marking
- “dummy” verbs

- syntactic asymmetries between matrix and subordinate clauses - grammaticalized subjunctive marking - verb-second - clitic movement - any pragmatically neutral word order but SVO - noun class or grammatical gender marking (analytic or affixal) - lexically contrastive or morphosyntactic tone beyond a few isolated cases

3.4.　Szmrecsanyi & Kortmann（2009a）の英語変種をめぐる指標

最後に、英語の変種に限定した Kortmann らのプロジェクト（Kortmann et al. 2004a, b）が対象とした指標（調査項目）を見る。個別言語を対象としているので、具体的な形式を含んだ指標が設定されている。

Kortmann らのプロジェクトは、世界の 46 の英語変種について、形態統語的に非標準形式が観察される 76 項目を調査票によって調査したものである（他に音声項目も調査している）。社会言語類型論的な考え方に依拠し、Szmrecsanyi & Kortmann（2009a）では、複雑性の違いが観察される項目を表 6 のように整理しつつ、英語の 4 タイプの変種（Traditional L1 varieties（North, Southwest and Southeast England English、Appalachian English など）、High-contact L1 varieties（Scottish English、Colloquial American English など）、L2 varieties（Chicano English、Fiji English、Singapore English など）、English-based pidgins and creoles（Gullah、Bislama、Hawaiian Creole など）。Szmrecsanyi & Kortmann 2009b では 2 つの L1 varieties を統合して 3 つ）がそのうちのどの特徴をもつかを分析している。

表 6　Szmrecsanyi & Kortmann（2009a）の指標（調査項目）

ornamental rule/feature complexity	- *she/her* used for inanimate referents - non-coordinated subject pronoun forms in object function - non-coordinated object pronoun forms in subject function - *be* as perfect auxiliary - *was sat/stood* with progressive meaning - *a*-prefixing on *ing*-forms - Northern Subject Rule (eg. *I sing, Birds sings, I sing and dances*)
L2 acquisition difficulty	- lack of number distinction in reflexives（−INFLECTION） - generic *he/his* for all genders（−PRONOUN） - absence of plural marking after measure nouns（−INFLECTION） - *do* as a tense and aspect marker（+ANALYTICITY） - completive/perfect *done*（+ANALYTICITY） - past tense/anterior marker *been*（+ANALYTICITY） - *would* in if-clauses（+TRANSPARENCY） - regularization of irregular verb paradigms（+GENERALIZATION） - unmarked verb forms（−INFLECTION） - zero past tense forms of regular verbs（−INFLECTION） - *ain't*（−INFLECTION）（3 調査項目） - invariant *don't* in the present tense（−INFLECTION） - *no* as preverbal negator（+PREVERBAL NEG）

	- invariant non-concord tags（−INFLECTION） - invariant present tense forms: no marking for third person singular（−AGREEMENT） - existential/presentational *there's* etc. with plural subjects（−AGREEMENT） - deletion of *be*（−COPULA） - use of analytic *that his* etc. instead of *whose*（+TRANSPARENCY） - resumptive/shadow pronouns（+RESUMPTIVE） - serial verbs（−SUBORDINATION） - lack of inversion/auxiliaries in *wh*-questions（−INVERSION/−COPULA） - lack of inversion in main clause *yes/no* questions（−INVERSION）

Ornamental rule/feature complexity とは'features or rules that add contrasts, distinctions, or asymmetries ... without providing a clearly identifiable communicative or functional bonus. (68)'とされるもので複雑度の高いものが、L2 acquisition difficulty の欄には成人英語学習者の中間言語に繰り返し観察されるような、習得が容易な項目が示してある（後者のカッコ内の大文字記載はその形態特性で、＋はその特性をもつもの、ーはそれをもたないものである。このリストにあげた特徴を多くもつ変種が、複雑度＝第二言語としての習得の難易度=difficulty が低い）。Szmrecsanyi & Kortmann（2009b: 1657）は分析の結果として、English L1 vernaculars＞L2 Varieties of English＞English-based creoles＞English-based pidgins といった複雑度スケール（左が複雑度高）を提示している。

以上、ここではタイプの異なる、言語の複雑性を測定するための 4 つの指標を取り上げて概観した。ここでは主に形態統語的な指標を中心に取り上げたために、たとえば音声面の指標などは Nichols（2016）や McWhorter（2001）の指標に含まれているところに付随的に言及したにすぎない。しかし、Fenk-Oczlon & Fenk（2008）や Trudgill（2011: ch. 5）などが音素の数や音節構造の複雑性と形態統語構造の複雑性、多義性などに注目して分析を加えているように、このレベルにも幅広い目配りが必要である。指標の設定はまだ試行錯誤を繰り返している状況であり、次の 2 点からする指標の検討が、継続的に必要なところである。

（a）形態統語レベルを含め、さまざまなレベルにおける指標の設定

（b）通言語的・通同系言語的な指標、個別言語内部の変種の複雑性を測る指標の設定

4. 複雑性研究の成果

複雑性をめぐる研究が蓄積してきた（中間的な）成果については、すでに 3 節で一部触れるところがあったが、ここでいくつかの研究の成果をまとめておこう。4.1 でトレードオフを検証した研究、4.2 で社会言語類型論研究の結果をいくつか取り上げる。

4.1. トレードオフ研究

「言語のある側面が単純であれば、別の、それと関連した側面は複雑になる」というトレードオフの有無を検証しようとした研究には、たとえば表 7 のようなものがある。対象とした言語（数）、対象項目（複雑性を測る指標。語彙的手段による表現装置は分析の対象とされていないことが多い）、およびその結果の一部を引用して示す。

表７　トレードオフの有無を検証した研究

研究	対象言語	対象項目	結果（一部）
Shosted 2006	32 AUTOTYP	phonological complexity (potential) syllable count morphological complexity inflectional synthesis on the verb maximally inflected forms agreement, tense/aspect/mood evidentials/miratives status (realis, irrealis) polarity (negation) illocution (interrogative, declarative, imperative) voice	・slightly positive but statistically insignificant ・the negative correlation hypothesis, if it is to be retained, still awaits scientific confirmation ・I conclude that the dictum “All languages are equally complex” is dogmatic.
Sinnemäki 2008	50	core argument structure (A, P) functional load of coding strategies head/dependent marking word order	・the functional use of word order had a statistically significant inverse dependency with the presence of morphological marking, especially dependent marking. ・Most other dependencies were far from statistical significance and in fact provide evidence against the trade-off claim. ・Overall, languages seem to adhere more strongly to distinctiveness [redundancy] than to economy. ・...most languages conform to the principle of one-meaning-one-form, but those that do not conform to it adhere to distinctiveness at the expense of economy. This may reflect the tendency in languages to accumulate complexity during their long histories, i.e., that they exhibit fewer simplifying tendencies.
Dahl 2009	Elfdalian (complex) Swedish (simple)	phonology vowels, consonants, suprasegmentals morphology nouns, adjectives, pronouns, verbs syntax （ただし複雑さの測定基準なし）	・case marking があると discourse のための語順が豊かになる（60） ・in a number of cases, complexities in morphology are accompanied by complexities in syntax.
Miestamo 2009	50	agreement and case hierarchies verbalization and copula hierarchies （それぞれのペアの内部の trade-off）	・there is no compensation between the agreement and case hierarchies; ・but the complexities of copular and verbal marking of stative predicates do show a trade-off effect. ・This points towards the conclusion that while compensations are found in some domains of grammar, they are not an all-encompassing phenomenon.

Nichols 2009	68	3.2 参照	・no negative correlations emerged on either set of comparisons, as it is negative correlations that support the hypothesis of equal complexity. ・ a highly significant negative correlation between populations size and overall complexity. ・ Within each of these macrocontinents there was no significant correlations between population size and complexity. ・I conclude that complexity balancing between different components of grammar is not supported cross-linguistically.

表のなかの、トレードオフ仮説に対する各研究の結論部分のみを取り出せば、次のとおりである。

- the dictum “All languages are equally complex” is dogmatic.（Shosted 2006: 33）
- provide evidence against the trade-off claim.（Sinnemäki 2008）
- complexities in morphology are accompanied by complexities in syntax.（Dahl 2009: 63）
- while compensations are found in some domains of grammar, they are not an all-encompassing phenomenon.（Miestamo 2009: 96）
- complexity balancing between different components of grammar is not supported cross-linguistically.（Nichols 2009: 121）

一部成り立つ事象があることを認めるものから、強く否定するものまで多様であるが、仮説が成り立つことを積極的に主張した研究はないようである。今後、この課題に継続的に取り組んでいくとすれば、言語のどの表現領域とどの表現領域がトレードオフの関係にあるか、対象とする言語事象をさらに広げて追究していくことが必要であろう。たとえば日本語方言の場合、無アクセントや一つ仮名（ジ・ズ・ヂ・ヅの融合）の方言、文法格が表示されない方言、進行相・結果相や能力可能・状況可能を区別しない方言、素材敬語を（あまり）もたない方言など、対立要素が少ない（compositional complexity が低い）方言があるが、これらの方言では、これらの意味・機能領域に関わる（語彙以外の）他の言語システムが複雑になっているのかどうか、もしそうだとすればそれはどのような装置なのか。その最初の手がかりとなるのは、やはり、従来トレードオフの関係にあると指摘されてきた言語事象（たとえば冒頭の引用 (1) (2) で述べられている形態論と統語論のあいだの相関事象など）であり、それらの事象を含め、理論的、あるいは直感的に考えられるところをできるだけ幅広く取り上げて、それぞれの事象のペアにトレードオフの関係があるかないかを確認していく作業が必要であると思われる。

4.2.　社会言語類型論研究

次に、社会言語類型論的な研究の、これまでの達成点を見てみよう。

4.2.1.　社会言語類型論の基本的アイディア

社会言語類型論は、言語や変種のもつ複雑性と、それが使用される社会の特徴の相関関係／因果関係を探る研究である。当該言語・変種が使用される社会（コミュニティ）の類型を特徴づける要因として、Trudgill（2011）などは以下のものをあげている。

① コミュニティの大きさ
② 社会的ネットワークの緊密度（density）
③ コミュニティの安定度
④ 成員間の情報の共有度
⑤ 外の社会（言語）との接触の度合い

コミュニティのサイズが小さく安定し、成員のネットワークも密で、情報の共有度が高く、外の社会や言語との接触が少ない（コミュニティ外部の成人に、第二言語・変種として習得されることがない）社会において使用される言語や変種は（必ずそうなるというわけではないが）そのシステムが複雑なものになる可能性があり、逆に、コミュニティのサイズが大きく安定せず、成員のネットワークが粗で、外の社会や言語との接触が多い（コミュニティ外部の成人に、第二言語・変種として習得されることが多い）社会において使用される言語や変種はそのシステムが単純なものになる、というアイディアである。その概要を、表８にまとめる。

表８　Trudgill（2011）の社会言語類型論の骨子

	isolated community	non-isolated community
community-size	小	大
social network	dense, multiplex	loose
social stability	stable	non-stable
amount of shared information	多	少
contact with outside-world	少	多
fast-speech-phenomena	あり（話し手の産出しやすさ優先）	なし（聞き手の理解しやすさ優先）
adult acquisition as L2	なし	あり
direction of change	・preservation of complexity ・increase in complexity	・less complex
outcome of change	・irregularity ・opacity ・syntagmatic redundancy ・non-borrowed morphological categories	・成人が L2 として習得容易な言語特徴の束

先に 2.3.2 で述べたように、社会言語類型論の研究を行うにあたっては、どの言語や変種を対象とするかが、その出発点で検討すべき重要な問題になる。このことについては、言語的な変数や、上の①～⑤以外の認知・社会的な変数が多岐にわたることを極力避けることが望ましいことから、同一言語の複数の方言や系統の近い姉妹言語（ゲルマン語など）で、使用される社会の状況が異なるものを対象とすることが広く行われるようになっている。

また、社会言語類型論的な研究には、研究者の興味のありか（進行中の言語変化や言語接触）を反映して、長い時間をかけて言語が複雑化するプロセス（文法化など）よりも、言語接触とそれに起因する言語の単純化に焦点を当てる研究が多い。

以下この順（方言間対照、姉妹言語間対照、接触変種）にその成果を見てみることにする。

4.2.2. 方言間対照研究

方言の複雑度と、その方言が使用される社会の類型を相関させた研究は、Andersen（1988）によれば、ウクライナ語の諸方言を対照し、heterogeneous speech community（都市部）のコイネーの母音音素数が少ないことを指摘した Jakobson（1971[1929]）などを嚆矢とする。近年では表 9 のような研究がある。

表 9　方言間対照研究の事例

研究	対象言語・方法・結果
Andersen (1988)	・ポーランド語の諸方言を対照（とくに方言接触地帯での伝播の方向） ・中心部における単純化（母音の数） ・周辺部における複雑化（parasitic consonant）
Kusters (2003)	・異なった社会的状況で使用される Arabic（Classical, Najdi, Moroccan, Nubi）、Scandinavian（Old Norse, Icelandic, Faroese, Norwegian）、Quechua（Cuzco and Ayacucho, Southern, Ecuadorian）、Swahili（Standard, Katanga, Kenyan Pidgin）内部の諸変種をそれぞれ対照し、その構造の複雑度と社会的類型の相関を最適性理論で分析 ・たがいに知り合い同士の小さなコミュニティが使用する変種から、多くの人々がリンガフランカ（第二変種）として使用する変種に移行するにしたがって、カテゴリーやカテゴリーの組み合わせ（combination）が減少する
Szmrecsanyi & Kortmann (2009b)	・creole や L2 English なども含む変種の、意味・機能を固定しての体系記述 ・L1 varieties＞L2 varieties＞creoles＞pidgins の順で複雑（上記 3.4 参照）

Jakobson（1971[1929]）や Andersen（1988）など、都市部と周辺部の方言を対照した研究は、都市部の方言のほうが単純であることを述べている。また、Kusters（2003）や Kortmann et al.（2004b）のような、言語接触の度合いや成人の第二言語習得の可能性を基準にして分析の対象変種を選んだ研究も、接触の多い言語や変種のほうが単純であることを、結論として引き出している。

4.2.3. 姉妹言語間対照研究

表 10 は、使用される社会の類型が異なる姉妹言語を対照した研究である。Braunmüller

（2016）と McWhorter（2005[2002]）は系統的に近い姉妹言語間の対照であるが（いずれもゲルマン語)、Nichols（2016）は特定の地域で使用される言語を対象としているため、対象言語が多様である。参考までに取り上げた。

ここでも、おおむね、接触の多い、中心部の言語は単純であり、孤立した周辺部で使用される言語は透明度の低い複雑な言語であることが確認されている。

表 10　姉妹言語間対照研究の事例

研究	対象言語・方法・結果
Braunmüller (2016)	・ゲルマン語での、Icelandic や Faroese の形態論的不透明さ（=complex・成人の習得のむずかしさ） ・この不透明さは規則的音変化によるもので、類推による補修はあまりない
McWhorter (2005[2002])	・ゲルマン語での、英語の位置の確認を目的とする ・English を、OE、German、Dutch、Yiddish、Frisian, Norwegian, Danish, Icelandic, Faroese, Afrikaans 等と対照 ・英語だけ、以下の特徴すべてをもっていない（形態以外の特徴を含む） - Inherent reflexivity marking (Ger. *sich rasieren* “to shave”) - External possessor constructions (Ger. *Die Mutter wäscht dem Kind die Haare.*) - Grammatical gender marking on the article - Derivational morphology（Verb prefixes (他動詞化の *be*-など), Suffixes（動詞化の *-sian, -ettan* など)） - Directional adverbs（OE *her/hider, þær/þider, hwær/hwider*) - *be*-perfect (Ger. *er ist gekommen*) - Passive marking with become - Verb 2nd - Singular *you*（disappearance of *thou*) - Indefinite pronoun（disappearance of *man*) ・implication - all languages are complex to a considerable, but not equal, degree - English is significantly less complex overall...than its sisters - there was a significant disruption in the transmission of English at one point in its history - *do*-support, 不完成相現在を表す *be*+現在分詞の義務化とそれに伴う bare verb の習慣用法、未来を担う 3 形式（*will, be going to, be*+present）など英語の複雑なところは、後世の発展 ・姉妹言語との disruption の時期は、（文化語ではなく）一般生活語彙の借用、地理的分布などから判断して、９～10 世紀の Danes の侵攻の時期
Nichols (2016)	・２地域（Daghestan（コーカサス)、eastern Eurasian Steppe）をそれぞれ分析 ・complexity proves to be greater at peripheries of language spreads than at centers; opacity is greater in sociolinguistically isolated languages.

4.2.4.　接触変種研究

4.2.2 の方言間対照研究および 4.2.3 の姉妹言語間対照研究はいずれも、複雑な言語と単純な言語の両者を対象とするものであったが、ここで取り上げる接触変種研究は、複雑な言語よりも、接触言語の単純化ということに注目するものが多い。2.2 で簡単に触れたピジン・

クレオールの研究や、3.3 で取り上げた McWhorter（2001）などの研究もここに含まれるが、ここではコイネーを分析した研究を取り上げておこう。便宜的に、植民地や移民先で形成されたコイネーを対象とするものと、大都市で形成されたコイネーを対象にするものに分けて整理する。

4.2.4.1. 植民地や移住先におけるコイネーの形成

まず、植民地や移住先におけるコイネー（immigrant koine（Siegel 1985）。Trudgill 2004 では new dialect）の形成過程を研究したものには、フィジーにおける Pidgin Fiji や Pidgin Hindustani とあわせて、インド北部のさまざまな言語を母語とする話者が形成した Fiji Hindustani を分析した Siegel（1987）や、同じくイギリスの各地からニュージーランドに移住した人々が形成したニュージーランド英語を、主に 2 世（1850～1889 年生まれの 1 世の子ども 84 人）の録音資料をもとに分析した Trudgill（2004）などがある。日本の各地から北海道に移住した人々が使用する日本語の、三世代にわたる変容過程を分析した国立国語研究所（1965）なども、1 世が持ち込んだ多様な方言が北海道共通語へと収斂する過程を描いたもので、ここに含められる。

表 11 は、Trudgill（2004）が整理した、ニュージーランド英語が形成されるまでのステップである。大局的には、1 世がニュージーランドに持ち込んださまざまな英語の方言が共存する段階（Stage I）、その多様な方言形式のなかから 2 世が個々に自由に形式を選択する段階（Stage II）、2 世が選択した形式のなかのマジョリティ形式（無標の形式であればマイノリティの形式も）を 3 世が選択して多様性が収束していく段階（Stage III）という 3 つの

表 11　Trudgill（2004）による NZ 英語の形成過程

stage	形成の主役	特徴
Stage I	1 世成人	・rudimentary levelling（levelling 前の形式も残す） ・accommodation が起こる（形式の saliency に依存） ・移住前に身についた規範意識も機能している ・interdialect development（partial accommodation, Stage I のみで起こる） ・hyperadaptation (imperfect accommodation)
Stage II	2 世子供	・目標とする peer model なし（accommodation が機能しない） ・個人ごと、variable ごとの自由な選択（世界でただ一人の variants の組み合わせが生じる。ただし社会としては一定の方向性がある） ・intra-individual variability ・inter-individual variability（同じ時期に同じ場所で獲得しても生じる） ・apparent levelling（概ね 10%以下の使用者数の形式は話者に気づかれずに消滅する。意識的な accommodation ではない）
Stage III	3 世子供	・accommodation の力が再び大きく作用するようになり、主として 2 世のマジョリティ形式に収束する ・unmarking（minority variants でも無標形式であれば選択される可能性が若干ある） ・reallocation（新旧両形式の棲み分け） ・形式の saliency はあまり関与的でない（3 世子供は、自身の特徴的な音声をもっていない）

段階を指摘している。基本的には、多様な方言形式が淘汰され（levelling）、その過程で残った形式は無標形式が中心であるために、できあがったコイネーは単純な体系をもつという図式である（現在のニュージーランドはすでにコミュニティとして確立してから時間が経過し、それと平行して言語面でも、収束したあとの、それを複雑化するプロセスに入っているとする）。

4.2.4.2.　都市変種の単純化

コイネーは、さまざまな地域から人が集まる大都市でも形成される。この都市変種に見られる接触言語的、コイネー的性格については、日本でも、江戸語・東京語研究のなかで、「近代語の成立過程に見られる分析的傾向」として指摘されてきた（中村 1957・田中 1965 など）。形式と意味が 1 対 1 で対応する方向への変化で（cf. one-to-one Principle, Andersen 1984）、以下のような特徴があげられている（田中 1965）。

整理：ある表現を担う表現単位（変異形）の種類が少なくなる

・否定のナイ・ヌ → ナイ

・未然形＋バ・仮定形＋バ → 仮定形バに一本化

単純：個々の多義的な表現単位の意味・機能が限定される

・意志・推量のウ・ヨウ → 意志専用化

・受身・尊敬・可能のレル・ラレル → 受身・尊敬だけに

分散：不透明な意味的複合形式を単純な意味を担う形式の合成によって表現する

・否定＋意志・推量のマイ → シナイ＋ダロウ（推量）・シナイ＋ツモリダ（意志）

・否定過去のナンダ → ナカッ＋タ

・否定命令のナ → シナイ＋デ＋クレ・スル＋ノ＋ハ＋ヨセ

一方、この対極にある周辺部の方言については、日本語の方言学においては、現状では複雑化することを指摘する研究はあまりないようであるが、関連する指摘としては、井上（1978）に、発音の変化は郊外に多いといった指摘があり、金田一（1977[1973]: 52）にも以下のような記載がある。

（8）日本で、『来れる』『見れる』はいけないとか、ガ行鼻音がどうとか言うのは、東京が一番うるさいようだ。昔の京都もさぞそうであったろう。それに対し、農村・山村・漁村では、親にとっては、子どもは稲の苗がちゃんと植えられたり、牛や馬の世話がよくできたりすることのほうが大切で、イとエの区別があやしかろうが、一々直してやろうと言う気持はもたなかったのではなかろうか。そういう子供が大きくなり、そういう傾向が続けば、言葉の根幹的部分などというものは、都会より田舎の方でどんどん変ってゆく道理である。

「田舎」ではなく移住先のことではあるが、規範に対する意識が低いということの指摘は、半田（1966）や Trudgill（2004）などでもなされている。

（9）同じ場所で二つ以上の方言が常にいりみだれていると、さてどちらが本当だろうかという疑念が起る。われわれは標準語と方言を対立させて、これは標準語であり、これは方言であるということを教えられたことがないのである。（ブラジル、栃木

出身、半田 1966: 120-121）

（10）We can assume that in the early colonial period [in NZ] most people (I am not saying 'all') had better things to do with their lives than worry about whether they 'dropped their *h*s' or not. （Trudgill 2004: 154）

しかし、金田一の言う「田舎の方でどんどん変ってゆく」というその方向については、これまで指摘されてきたところでは、社会言語類型論が想定している複雑な方向よりも、金田一の例にあるラ抜きことばやガ行鼻音（の口音化）、イとエの混同（合流）や、逆周圏分布をなす事象としてよく取り上げられる一段動詞のラ行五段化、アクセントの無型化（型の合流）など、目録面で複雑度が低くなる変化のほうが目につく。日本の周辺部の方言において、社会言語類型論が予測するように複雑な方言が発達するか否かを明らかにするためには、今後、複雑性の視点からあらためて各地の方言を捉え直す必要がある。

5. 展望

以上、本稿では、これまで行われてきた言語の複雑性をめぐる研究について、3 つの源流を確認するとともに（2 節）、研究のなかで使用されてきた複雑性を測る指標（3 節）と、これまでにあげてきた成果（4 節）を概観した。本節ではこれらを踏まえたうえで、今後行われるべき研究の方向性や課題をまとめておこう。たとえば社会言語類型論の立場に立って日本語や日本語方言を分析しようとしたとき、今後行われるべき研究としては、すでに述べたことも含めて、以下のようなものがある。

（a）方言間対照による複雑性を測る指標の取り出し

（a-1）複数の、社会的類型の異なる地域で使用される方言のさまざまな言語事象や下位体系を対照することによって、複雑度に違いが観察される言語事象を見出す。

（a-2）上の（a-1）の成果を踏まえて、さまざまな方言の複雑度を同時に対照できる言語的指標を見出す。

（a-3）このような指標のなかで、各方言内においてトレードオフの関係にある言語項目がないかどうかを確認する。

複雑性の問題に限らず、方言間対照を行うためには、記述が十分に行われていることが前提である。その蓄積が多い琉球語の諸方言についてはこの種の研究を行うのに適した環境が整えられつつあるが、日本語の方言についてはまだ不足するところがある。日本語方言学は、音素・アクセント体系や、文法の形式面についてはかなりのデータを蓄積してきており、格、ヴォイス、アスペクト・テンス・モダリティ等についても一定の蓄積があるが、たとえば格について、文法格が形式的に表示されない方言でのトレードオフを確認するなどの作業に当たっては、Bisang の言う hidden complexity なども視野に入れた記述が必要となる。

（b）各方言の複雑度とそれが使用される社会の類型との相関の確認

これは 4.2.4.2 の末尾で述べたことの繰り返しである。日本語方言のなかでの、たとえば、東京方言のような大都市と山形市方言のような地方の中規模都市の方言を対照する研究課題のほか（渋谷予定）、隣接する大規模な都市と中規模都市（仙台と山形市など）や、中規模都市とその周辺部（山形市と東根（斎藤 1959））など、規模の異なるさまざまな言語共同

体で使用される方言を複雑性研究の視点から対照して、方言の複雑度と社会の類型の相関を確認するといった課題がある。なお、仙台方言と山形市方言、山形市方言と東根方言のように、総体的に類似する方言間の対照においては、4.2.2 で取り上げた Jakobson（1971[1929]）や Andersen（1988）のように、ローカルな個別の言語事象に注目することになるが、そうであれば、『日本言語地図』や『方言文法地図』、あるいはそれらを資料として分析されてきた言語事象の言語地理学的な研究の分析結果を利用することができる（一段動詞のラ行五段化など）。ここで新たに行うべきことは、社会言語類型論的な視点から、蓄積されてきた研究成果を再解釈するということである。

（c）社会言語類型論と言語史研究・文化言語学との融合

これは、（b）の作業を行う際に、各社会の類型のなかに文化情報も加え、広く言語体系の存立基盤を探ろうとするものである。たとえば、次の引用が指摘するような言語の傾向が存在する社会文化的な理由や、主張などに、答えを出していく研究である。

（11）いわゆる接続詞が、近代語に入って幾つも生産されたという事実もまた、論理的表現を好む傾向の反映であろう。（中略）中世、すなわち鎌倉・室町の頃は、このような複雑な過程を経てまで接続詞を作ることが、とりわけ好まれた時代であったように推定される。（渡辺 1997: 154、158）

（12）アマゾン流域の人々の文化的方向性が、「根拠の性質」（nature of evidence）を必要なひとつの文法体系として進化させやすいものであるようだ。（ディクソン 2001: 168）

（13）文化的状況から切り離して言語を研究することはもちろん可能だし、そこから興味深い事実をたくさん知ることもできるだろう。けれどもそれでは、文法の秘密を解き明かす基本的な鍵は、きっと見つからないだろう。（エヴェレット 2012：339）

（d）言語類型論研究のデータと成果の見直し

これは、上の（a）～（c）の成果の応用面に関わる課題である。Kortmann（2004）などにも指摘があるように、言語類型論研究は、基本的に、厚い文法記述が用意されている各言語の標準語（相当変種）をデータとして行われているところがある。しかし標準語には、それが使用されるレジスター（学術論文や公的場面などでの使用）とも関連して、方言の特徴とは大きく異なっている部分がある（複合格助詞の種類が豊富であることなど。渋谷 2018）。どの方言を選択するかにもよるが、言語の類型を認定するためのデータに方言の情報を加えれば、たとえば Haspelmath et al.（2005）の日本語部分など、情報を追加／変更するのが望ましい項目も出てくるであろう（74 Situational possibility で Affixes on verbs とあるところなど）。

（e）研究の緊急性

以上、（a）～（d）にまとめたように、言語の複雑性をめぐる研究にはさまざまな課題が残されているが、最後に、それらのすべてに関わる研究遂行上の問題として、研究の緊急性ということがある（Trudgill 2011: Epirogue など、本展望が取り上げた研究のいくつかでも指摘されている）。上の（d）で述べたように、記述研究が進んでいるのは、標準語をはじめとする、言語接触を繰り返している大きな言語や社会的に威信をもつ変種であり、周辺部の

isolated languages については複雑性を論じるだけの十分なデータがないケースが多い。しかも、後者のような言語が使用されてきた地域では都市化が進み、他の地域の人々と接触する機会が増えている。周辺部で使用されている複雑な方言も、言語接触を経験することによって、短期間のうちにその複雑性を失っていく（したがって複雑度の高い言語が消滅していく）可能性がある。日本の方言学などは、NORMs のことばの研究を行っていた伝統から脱して、地域社会の多様な話者を対象とする社会言語学的な研究に発展した歴史をもっているが、言語の複雑性の研究の立場からは、消滅の危機に瀕している方言の記述と歩調を合わせて、あらためて周辺部の方言の記述的研究の蓄積が望まれるところである。

〈付記〉本研究は JPSP 科研費 19K00627 の助成を受けたもので、2021 年 3 月 12 日開催の第 4 回 HiSoPra 研究会（オンライン）で行った話題提供の内容をまとめたものです。当日貴重なご意見をくださった方々に御礼申し上げます。

【参考文献】

井上史雄（1978）「《新方言》の分布と変化」『山形方言』14，pp.1-12，山形県方言研究会.

エヴェレット, D.（2012）『ピダハン―「言語本能」を越える文化と世界観―』新曜社（屋代通子訳）.

金田一春彦（1977[1973]）「比較方言学と方言地理学」『日本語方言の研究』pp.25-53，東京堂出版.

国立国語研究所（1965）『共通語化の過程―北海道における親子三代のことば―』秀英出版.

斎藤義七郎（1959）「山形県北村山郡東根町」国立国語研究所編『日本方言の記述的研究』pp.21-50，明治書院.

渋谷勝己（2018）「標準語の癖―論理性と分析性―」『日本語学』37-1，pp.50-59，明治書院.

渋谷勝己（2019）「『裏側』のことば」『日本語学』38-12，pp.2-10，明治書院.

渋谷勝己（予定）「山形市方言における動詞述語の分析性と融合性―複雑性の指標を求めて―」『待兼山論叢 文化動態論篇』55，大阪大学文学会.

田中章夫（1965）「近代語成立過程にみられるいわゆる分析的傾向について」『近代語研究』第 1 集，pp.13-25，武蔵野書院.

ディクソン, R. M. W.（2001）『言語の興亡』岩波新書（大角翠訳）.

中村通夫（1957）『現代語の傾向』宝文館.

ネトル, D.・ロメイン, S.（2001）『消えゆく言語たち―失われることば、失われる世界―』新曜社（島村宣男訳）.

半田知雄（1966）『今なお旅路にあり』太陽堂書店.

渡辺実（1997）『日本語史要説』岩波書店.

Aitchison, J. (1981) *Language Change: Progress or decay?* Bungay, Suffolk: Fontana.

Andersen, R. (1984) The one-to-one principle of interlanguage construction. *Language Learning* 34-4: 77-95.

Andersen, H. (1988) Center and periphery: adoption, diffusion and spread. In J. Fisiak (ed.)

Historical Dialectology: Regional and social, pp.39-83. The Hague: Mouton de Gruyter.

Baechler, R. and G. Seiler (eds.) (2016) *Complexity, Isolation, and Variation*. Berlin: Walter de Gruyter.

Baechler, R. and G. Seiler (2016) Introduction. In Baechler, R. and G. Seiler (eds.), pp.1-13.

Bisang,W. (2009) On the evolution of complexity: sometimes less is more in East and mainland Southeast Asia. In Sampson, J. et al. (eds.), pp.34-49.

Braunmüller, K. (2016) On the origins of complexity: evidence from Germanic. In Baechler, R. and G. Seiler (eds.), pp.47-69.

Bynon, T. (1977) *Historical Linguistics.* Cambridge: Cambridge University Press.

Crystal, D. (1987) *The Cambridge Encyclopedia of Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

Dahl, Ö. (2004) *The Growth and Maintenance of Linguistic Complexity*. Amsterdam: John Benjamins.

Dahl, Ö. (2008) Grammatical resources and linguistic complexity: Sirionó as a language without NP coordination. In Miestamo, M. et al. (eds.), pp.153-164.

Dahl, Ö. (2009) Testing the assumption of complexity invariance: the case of Elfdarian and Swedish. In Sampson, J. et al. (eds.), pp.50-63.

Dixon, R.M. W. (2010) *Basic Linguistic Theory Vol.1: Methodology.* Oxford: Oxford University Press.

Fenk-Oczlon, G and A. Fenk (2008) Complaxity trade-offs between the subsystems of language. In Miestamo et al. (eds.), pp.43-65.

Givón, T. (2008) *The Genesis of Syntactic Complexity*. Amsterdam: John Benjamins.

Haspelmath, M., M. S. Dryer, D. Gil and B. Comrie (eds.) (2005) *The World Atlas of Language Structures*. Oxford: Oxford University Press.

Hawkins, J. A. (2007) *The Efficiency and Complexity in Grammars*. Oxford: Oxford University Press.

Hockett, C. F. (1958) *A Course in Modern Linguistics.* New York: Macmillan.

Hopper, P. (1991) On some principles of grammaticization. In Hopper, P. and E. Traugott (eds.) *Approaches to Grammaticalization Vol. I: Focus on theoretical and methodological issues*, pp.17-35. Amsterdam: John Benjamins.

Jakobson R. (1971[1929]) Remarques sur l'evolution phonologique du russe comparée à celle des autres languae slaves. In *Selected Writings I: Phonological studies*, pp. 7-116. The Hague: Mouton.

Karlsson. F., M. Miestamo and K. Sinnemäki (2008) Introduction: the problem of language complexity. In Miestamo, M. et al. (eds.), pp. vii-xiv.

Kortmann, B. (2004) Introduction. In Kortmann, B. (ed.) *Dialectology Meets Typology*, pp.1-10. Berlin: Mouton de Gruyter.

Kortmann, B., K. Burridge, R. Mesthrie, E. W. Schneider and C. Upton (eds.) (2004a) *A*

Handbook of Varieties of English Vol. 1: Phonology. Berlin: Mouton de Gruyter.

Kortmann, B., K. Burridge, R. Mesthrie, E. W. Schneider and C. Upton (eds.) (2004) *A Handbook of Varieties of English Vol. 2: Morphology and Syntax.* Berlin: Mouton de Gruyter.

Kortmann, B. & B. Szmrecsanyi (eds.) (2012) *Linguistic Complexity: Second language acquisition, Indiginization, contact.* Berlin: Walter de Gruyter

Kusters, W. (2003) *Linguistic Complexity: The influence of social change on verbal inflection.* Utrecht: LOT.

Larsen-Freeman, D. (2012) Preface: a closer look. In Kortmann, B. and B. Szmrecsanyi (eds.), pp.1-5.

Lehmann, C. (1985) Grammaticalization: synchronic variation and diachronic change. *Lingua e Stile* 20: 303-318.

McWhorter, J. (2001) The world's simplest grammars are creole grammars. *Linguistic Typology* 5: 125-166.

McWhorter, J.F. (2005[2002]) What happened to English? In McWhorter, J.F. *Defining Creole*, pp.267-311. Oxford: Oxford University Press.

Meillet, A. (1958[1912]) L'evolution des formes grammaticales. In Meillet, A. *Linguistique historique et linguistique générale*, pp.130-148. Paris: Champion.

Meisel, J. (1983) Strategies of second language acquisition: more than on kind of simplification. In Andersen, R. (ed.) *Pidginization and Creolization as Language Acquisition*, pp. 120-167. Rowley, MA: Newbury House.

Miestamo, M., K. Sinnemäki and F. Karlsson (eds.) (2008) *Language Complexity: Typology, contact, change.* Amsterdam: John Benjamins.

Miestamo, M. K. (2009) Implicational hierarchies and grammatical complexity. In Sampson, J. et al. (eds.), pp.80-97

Mühlhäusler, P. (1974) *Pidginization and Simplification in Language. Pacific Linguistics* Series B-26.

Narrog, H. and B. Heine (2021) *Grammaticalization.* Oxford: Oxford University Press.

Nichols, J. (2009) Linguistic complexity: a comprehensive definition and survey. In Sampson, J. et al. (eds.), pp.108-125.

Nichols, J. (2016) Complex edges, transparent frontiers: grammatical complexity and language spreads. In Baechler, R. and G. Seiler (eds.), pp.117-137.

Rescher, N. (2019[1998]) *Complexity: A philosophical overview.* New York: Routledge.

Sampson, J., D. Gil and P. Trudgill (eds.) (2009) *Language Complexity as an Evolving Variable.* Oxford: Oxford University Press.

Shosted, R. K. (2006) Correlating complexity: a typological approach. *Linguistic Typology* 10: 1-40.

Siegel, J. (1985) Koines and koineization. *Language in Society* 14: 357-378.

Siegel, J. (1987) *Language Contact in a Plantation Environment: A sociolinguistic history of Fiji.*

Cambridge: Cambridge University Press.

Sinnemäki, K. (2008) Complexity trade-offs in core argument marking. In Miestamo, M. K. et al. (eds.), pp.67-88.

Sinnemäki, K. (2011) *Language Universals and Linguistic Complexity: Three case studies in core argument marking.* University of Helsinki.

Szmrecsanyi B. and B. Kortmann (2009a) Between simplification and complexification: non-standard varieties of English in the world. In Sampson, J. et al. (eds.), pp.64-79.

Szmrecsanyi B. and B. Kortmann (2009b) The morphosyntax of varieties of English worldwide: a quantitative perspective. *Lingua* 119: 1643-1663.

Trudgill, P. (1986) *Dialects in Contact.* Oxford: Blackwell.

Trudgill, P. (2004) *New-Dialect Formation: The inevitability of colonial Englishes.* Edinburgh: Edinburgh University Press.

Trudgill, P. (2011) *Sociolinguistic Typology: Social determinants of linguistic complexity.* Oxford: Oxford University Press.

しぶや　かつみ（大阪大学）